

# 保育者養成校教員と実習園における保育者との協働のあり方

－ 木曜研究会・保育実践講座による研究事例 －

岡田 恵<sup>\*</sup>・加納 章<sup>\*</sup>・児嶋 雅典<sup>\*\*</sup>・出原 大<sup>\*\*\*</sup>

※松山東雲短期大学・※※城南保育所・※※※むぎの穂保育園

## How to collaborate between teachers at childcare training schools and childcare workers at training schools

－ Example of training by Thursday study group / childcare practical course －

Megumi OKADA <sup>\*</sup>, Akira KANOU <sup>\*</sup>, Masanori KOJIMA <sup>\*\*</sup> and Dai IZUHARA <sup>\*\*\*</sup>

*※ Matsuyama Shinonome Junior College*

*Kuwabara, Matsuyama*

*※※ Jonan Nursery School*

*Hachiman, Tokushima*

*※※※ Muginoho Nursery School*

*Yokogawara, Toon*

*(Received Jan. 19, 2024)*

### Summary

Training of childcare workers in rural areas cannot survive without building relationships with the local community. At Matsuyama Shinonome Junior College, we have built a system based on Thursday study groups and childcare practical courses. There are two main reasons for this. One is to develop new students into useful human resources. The second is to improve local childcare practices. In this study, we will clarify the important role played by childcare training schools based on the case study of training sessions consisting of university teachers and on-site childcare workers.

### 1. はじめに

社会状況の変化に伴い、乳幼児期の環境においては様々な問題を包括している。コロナ感染症拡大予防策をはじめ、様々な感染症予防策など、今まで以

上に子ども一人一人への育ちを保障しつつ、将来の日本を担う人格形成を育むことは社会の最重要課題の一つである。その一端を担う保育者の質については「どのように子どもたちの発達過程を理解するか」が重要であると考えられる。子どもを育む役割は、保護

者が第一義である。しかし核家族化による閉塞的な子育て環境で、保護者自身が様々な問題を抱え育児が難しい中、乳幼児教育に携わる専門機関に求められる社会的責務は重要である。現代の子育て支援が保育専門職に求められる理由はここにある。幼稚園教諭・保育士・保育教諭に求められる保育者の「子ども理解」とはどのようなことを示すのであろうか。『保育所保育指針解説書』<sup>1)</sup>には、保育者の専門性として「子どもの育ちの成長・発達を援助する技術」「生活援助の知識・技術」「保育の環境を構成していく技術」「様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術」「関係構築の知識・技術」「保護者等への相談・助言に関する知識・技術」が明記されている。津守（1997）は、「専門性を有した態度、知識・技術の観点で表現される保育者には身体労働とそれ以上に知性を要する作業であり子どもと過程とともに生きる」<sup>2)</sup>と述べている。これらのことを学ぶ保育者養成校（以下、養成校）が担う責務は大変重要で、保育学生一人ずつが多岐にわたる専門性に対応する専門知識の習得や実践力を包括した学修の取り組みが必須なのである。また、卒業した後において保育実践の中で様々な問題を抱え、悩み相談に対応することも重要な役割だと考える。

## 2. 目的と内容

地方の保育者養成は、大学近隣地域はもちろんのこと、実習対象園への関係を築かなければ生き残れない。本学は、木曜研究会・保育実践講座を基本に構築してきた。その理由は大きく分けて二つある。一つは入学してきた学生を有用な人材に育てること。二つ目は、地域の保育実践を改善することである。大学の教員と現場の保育者として構成される研究会は主に、毎月第三木曜日19時から2時間程度開催されている（以下、木曜研）。研究内容については、共通のテーマや事例を提示しながら行っている。これに対して参加者はそれぞれの考えを示すことで「子ども理解」へと結びついていく。

## 3. 現職保育者と研究の始まり

本学の研究会の始まりについては、1984年頃である。当時の卒業生が毎週のように吉村 真理子先生（本学名誉教授、以下、吉村先生）<sup>(注釈)</sup>を訪ねて保育実践の中で様々な問題を抱え、相談にきていたことが始まりである。

主な相談内容は、以下の通りである。「なかなか休めない」「子どもはかわいいけれど結婚したら辞めなければならない」「一緒に組む先生の保育についていけない」「連絡帳に書いても保護者からの返事がない」「記録をどう残したらいいのか」「3歳児のクラスをまとめられない」「落ち着かない子がいる」「障害が心配な子がいる」「好き嫌が多い子がいる」「ベテランの先生と比較される」「ゲームの中でルールを守れない子がいる」「当番を自分からしてくれない」などこれらの不安や悩みは、同僚に相談できずにいるようであった。

この相談は、卒業生のアフターケアをかねた勉強会となり、定期的に継続され、半年くらい経った頃、「園の同僚の先生を連れてきたい」と参加者の一人（当時の参加者は数名でした）が尋ねたことから、勉強会は「木曜研究会」となり、月例会として誰でも参加できるようになった。当初は、吉村先生が中心となり、卒業生の実践報告や保育映画鑑賞、その季節の曲を歌ったりして和やかな時間を過ごしていた。この「木曜研究会」は現在も継続している。

そのほか、毎月開催している研究会とは別に、「保育実践講座」（1991年より）を開催している。

これは、県内の各地（松山、北条、城川、大洲、八幡浜、東予、西条など）に「子ども中心の保育」をテーマに、毎年10月頃より8回程度の連続講座で現場の保育者が勤務を終えてから参加できる時間で開催している。初年度のテーマは「保育指導法の研究」で連続9回の講座であった。第2回目のテーマは「指導計画を立てる」第3回目は「保育の環境とは」であった。これらは、平成元年の保育所保育指針の改訂に合わせた内容で、当時の保育現場には意

義のある研究となった。この「保育実践講座」は現在も継続している。

その他、養成校としての研究会「幼児教育後援会」(1987年より)も開催していた。内容については、保育界の最新情報について講師を招き、地域の保育者への研究の場を提供する企画であった。当時の講師には、フレーベル研究で著名な荘司雅子先生や森上史朗先生、高杉自子先生、小川博久先生などである。他にも、津守真先生、河合隼雄先生、平井信義先生にも講師をお願いしたこともあり、参加者は予想以上に多かった。残念ながら「幼児教育後援会」については現在実施されていない。

#### 4. 木曜研究会における事例

木曜研における現場保育者からの不安や悩みについて、吉村先生からは以下のようなアドバイスがあった。

##### (1) 連絡帳

保護者には忙しい人が多いこと、時間があっても書くのが苦手な人もいることを伝え、「でも、どの保護者も楽しみにしていること、返事がなくても必ず読んではある」と卒業生を励まされた。

##### (2) 子どもの理解・クラスをまとめること

「3歳児をまとめるのは難しいこと。この時期はまだまだ自己中心で周りのことより自分のことなので、無理にまとめようとすると、子どもを叱ったり、先生に笑顔がなくなったりする」「落ち着かない子はどこにでもいる。気にしすぎるとより落ち着かなくなってしまう」「障害についても、その程度は子どもによってさまざまだから、境界線を引きにくく、保育者は子どもを障害者として見るのではなく、人として見るのが仕事。もちろん障害については考慮しなければならない」「保育で大切なのは子どもをまとめられるかどうかではなく、子どもが自分から遊ぶように環境を整えることが仕事。うまくまとめたと思って大人が遊ばせているのであって、子どもが自分から遊んでいないことが多い」「3歳児

はルールどおりに遊ばなくても、参加しているだけでもうれしいこともあるし、しばらく様子を見てみるとルールの意味を理解することもある。大人がそれを待たなくて、子どもが自分で考えるのを妨げたりすることになることが多く、遊びはルールどおりにしなければならないと考えなくていい。本当に大切なことはルールがないと楽しく遊べないことに子どもが気づくこと」「5歳くらいになると自分たちで遊びのルールを変える姿も見られるが、たいていは、それまで大人が待てない場合が多い」

##### (3) 当番について

「当番をしないのは珍しいことではない。保育者が仕方ないからするという気持ちの場合は、子どもも積極的にはしないことが多い。大切な役割だし、楽しい活動だから保育者自身がするような雰囲気を感じれば子どもは自分たちがしたい気持ちになる。実際に当番を始めたら、1週間ほどでしなくなったりする。そうなったらまた保育者がしたらいい。でも、たいていの人には子どもが当番をするかどうかだけを見ている。だから、しなければ心配になる。当番を取り入れて子どもに経験してほしいことは別のことだと思う。それは『保護者的な気持ち』だと思う。家庭では、子どもたちには自分に任せられていることはほとんどない。何かしたら2度手間なることがある。いつも大人のお世話になるしかない。でも、誰でもそうであるように、全部してもらっては嫌で、自分も誰かのために何かしたい。幼くても自分の存在を喜んでくれる人が必要。それに応えてくれるのがお手伝いや当番。2歳児でもおしぼりや食器でも先生に頼まれると喜んで厨房に運んでくれる。当番は、このウサギは僕がお世話をしているから元気なのだという保護者的な気持ちを満たしてくれる」

本研究会は、以上のような保育実践のエピソードより考察が述べられる形式にこだわっていた。これは、参加者・保育者が自分の保育実践と照らし合わせて述べる考えについて、ともに実践者である保育者や学識者、異業種の立場、保護者の立場など多様な視点をもって討議、意見交換され、よりレベルの

高い保育実践（子どもを中心に据えた保育実践）を追究する側面が大事にされていた。

このような形式をもって行われる本研究会において、以下のような実践的省察が、保育における理論と実践が合致したかたちで得られた。

- ・利己的な大人都合の保育の問題を捉える
- ・他人の保育観にふれることでより広い見識を得る
- ・陥りやすい保育者主導型保育の問題を再考する
- ・最新の知見にふれることによる振り返り
- ・保育環境の多様性を知る

保育実践は、人が個人の主観によって行われる性格上、どうしても感情的になり、大人の主体的な思いにより進められることが多い。この観点、本研究

では、実践者が子どもの発達を理解しておくことや、子どもの姿（目に見える側面・目に見えない側面）を注視することから見えてくるもの熟考し、さらなる意見交換をすることで問題解決をしてきた。また、このエピソードをもって保育の評価を行う際、吉村先生は、単にデータに基づく保育解析のみならず、常に子どもをよく見て、ときにその空気感も考察の観点におくことを指導された。

これらのアドバイスは、保育は子どもだけのことではなく、大人の生き方にも大きくかかわっており、日常の大人の生活を見直す視点でもあり、人間を考えることでもあり、教育の基本だと考える。

表1. 木曜研究会 主なテーマ

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・新世紀にふさわしい保育内容を考える（言葉・行事・保育内容等のシリーズ）</li> <li>・子どもや保護者とともに</li> <li>・保育所保育指針・幼稚園教育要領とこれからの保育実践</li> <li>・子どもの健康と生活</li> <li>・保育の質で問われているもの</li> <li>・子どもとことば-うたうことについて</li> <li>・振り返りと展望のとき-子どもの将来を見据えて</li> <li>・保育の原点を体得する</li> <li>・新世紀にふさわしい保育内容を考えるシリーズ</li> <li>・会話を取り戻そう</li> <li>・他人のことを思いやる気持ちを</li> <li>・保育のテンポを見直す</li> <li>・幼保一元化について</li> <li>・生命の大切さを伝える</li> <li>・人間らしさを育てる言葉の役割</li> <li>・公平と差別という観念について</li> <li>・しつけと自立</li> <li>・子育て支援事業に伴う保育内容を創る</li> <li>・園生活をとらえ直す</li> </ul> |
|---|

## 5. 保育実践講座におけるテーマ

保育実践講座は、毎年11月頃より月2回開催とし、2月頃までの期間で行っている。開催時間は木曜日研究会と同様に、地域の保育者が参加しやすいように、19時から21時頃までとしている。

2020年度はコロナ感染症拡大のため中止となったが、テーマを決め保育科及び本学女子大学こども専攻教員や、他学科の教員、地域の保育者などから講師を依頼し2時間程度実施している。2023年度は、「子ども理解を深める」～保育の質を確保・向上させていくために～である。

表2-1. これまでの保育実践講座のテーマ（1991年～2008年）

年	テーマ
1991	第1回「保育指導法の研究①～⑨」連続9回
1992	第2回「指導計画を立てる①～⑧」連続8回
1994	第3回「保育の環境とは①～⑨」連続9回
1995	第4回「保育者の専門性とは①～⑧」連続8回
1996	第5回「保育を楽しむ①～⑧」連続8回
1997	第6回「これからの保育を考える①～⑦」連続7回
1998	第7回「心の教育を考える①～⑧」連続8回
1999	第8回「新しい教育要領と保育指針を考える①～⑦」連続7回
2000	第9回「子育て支援を考える①～⑧」連続8回
2001	第10回「保育者の専門性を考える①～⑦」連続7回
2002	第11回「子どもの園生活と環境を考える①～⑧」連続8回
2003	第12回「子どもの園生活と環境を考える①～⑧」連続8回
2004	第13回「実践事例を通して保育内容と方法の基本を考える①～⑧」連続8回
2005	第14回「今、保育において大切にしたいもの①～⑧」連続8回
2006	第15回「今、改めて保育の原点を問う①～⑧」連続8回
2007	第16回「子どもの傍らにあることの意味①～⑧」連続8回
2008	第17回「保育実践を高めるために①～⑧」連続8回

表2-2. 2023年度のテーマ

回	テーマと内容
第1回	保育や子どものことを語り合う
第2回	自然植物・遊びのすすめ！ 植物環境に触れることの重要性について
第3回	乳幼児期から児童期へ子どもの育ちと学びをつなげる
第4回	(初任者向け)保育を語ろう！
第5回	子ども理解を深める

表3. 参加者アンケート 2019年度 (抜粋)

よい学びになった。

自分自身の気づきとなりました。

保育者間でもなかなか答えが出てこないテーマをあげていただいているので勉強になる。

新しい知識を学ぶことができてよかった。

日々ろいろなことに悩んでいるが、講座に参加することで明日からの仕事に向かう気持ちが高められた。

東雲の卒業生です。学生時代に学んだことと実際に働いている中で感じるギャップで苦しむことが多い。

会話、対話、昔のやり方ではだめだと感じた。今の世代にあったやり方を学びたい。

今現場で悩んでいる内容で、今後園で取り入れたい具体案がわかりました。

本日のテーマは日頃悩んでいたものでした。今後に向けたヒントをたくさんいただいた。

自己受容ということばが大事と知った。できていること、できていないこと、どちらも受け入れていく必要があると思った。会話の必要性を改めて知った。

自己肯定感は子どもにかかわるにおいても新卒保育者とかわるにおいても大事なことと思っていたが、「自己受容」「ソリューショントーク」「ダンシングクルーガ」というキーワードを知り、今後の手立てとなりそうです。

保育者からの視点として学ぶことができた。

あたためて学び直したこと、新しく知ったことそれぞれあり、普段の保育や子どもたちの向き合いかたなどより深く考えることができる時間となった。

いつも前向きになる話で勇気がでます。

参考になったことを保育に活かしていきたい。

今回の研修で聞いたこと、実感することが多くあります。若い先生たちを育てていく中で大事にしないといけないことを学べた。

日々の保育でいっぱいになる中、定期的にいろいろなことを学ぶ機会があつてありがたかった。





図1. 保育実践講座の様子

## 6. 現職保育者と研究を継続する必要性

保育者は保育の質向上のため講習会等で自己研鑽に努めている。しかし幼稚園、保育所ともに平日の研究は大変難しく自己負担により休日返上で講習会等に出向き保育の技術や知識を磨いており、保育者が平日に学ぶ機会の獲得は大変困難な状況にある。

保育実践講座参加者からのアンケート（表3 2019年抜粋）には、本研究会に参加した理由には、「保育者としての研究会は多く開催されているが、自分自身の保育のあり方を気軽に話せる機会がない」などの記述からも、自己成長するためには他者とのつながりを通して、自身の保育に対する悩みなどを同僚以外の保育者と対話することが保育の質の向上に繋がると考えられる。

本学で実施されている教員と現場の保育者で構成される「木曜研究会」や「保育実践講座」は、実習担当者は出来る限り毎回出席して、現場の保育者との関係を築き、様々な実践事例や実習に関する意見交流を行っている。これは、地域に根ざした養成校の役割を担うために地域の保育実践の新機軸を提案や改善することもあり、これまで現場に数多くの学生を送り出してきた保育者養成校にとって重要な役割を果たすことになり、養成校保育現場との信頼関係構築の場になっている。

そして保育の提案を実践に落とし込むためにも、

附属園との連携をさらに強固にし、公開保育などの実践を通して型となるものを発信し、本質的部分を「保育実践講座」や「木曜研究会」を通して発信していくことができるシステムの整理、構築が必要になってくる。

## 7. 終わりに

本学で開催されているこれらの研究会では、保育者や主任、園長などの役職者、行政に携わる保育関係者等から形成されており、身近に現場の声を聞いたり意見を交わしたりすることができる。このような参加者から新たな知見や情報を得られ保育の質を高められる効果を持っていると考えられる。また、保育に従事し、常に子ども達とかがわっている保育者からの提言から、様々なことを立ち位置の違った視点を通して教員は学ぶ事ができる。制度の変化や子どもたちの生活状況、子育て支援等、子どもを取り巻く環境が変化する中、大学教員では知り得ない現場の状況、子どもの思い、保育者の苦悩・喜びを研究時の対話から学ばせていただけることは、大学教員が保育現場にできる限り関心を持ち、保育現場を知る重要な役割を果たしている。しかし、浅井(2016)<sup>3)</sup>が述べているように、保育者、大学教員それぞれに業務があるため、継続的に参加を求めることは困難である。今後の課題は、遠方のために参加

がむつかしいと考える人たちのために、遠方であっても参加を容易にするための対策を考えていかねばならない。コロナ渦以降、遠隔地からも参加できるような研究会も増えているため、そのような形態の参加を技術的なことも含め検討していけるようにしていくこと。また、保育実践の改善を目指す志向性の高い保育者、大学教員、保育関係者の参入を促すとともに、そうした人材を養成することが課題である。

## 注釈

吉村 真理子氏は、1979年4月より2007年3月まで松山東雲短期大学において保育者養成に携わっていた。履歴及び教育上、学術上の業績において保育に関する著者は多数あり、現在の保育者養成においても実践的な保育研究の発展に貢献している。また、現在に至るまで全国各地域において講演や研修を通して保育現場の資質向上に尽力している。2021年度松山東雲女子大学・短期大学案内においては「世代を超えて受け継がれるもの」として在学生とともに座談会を実施し、東雲の保育者養成が大切にしていることを語りつなぐなど、ご退職後も本学での研究会に参加され活躍されている。

## 参考文献

- 1) 保育所保育指針解説所、(平成30年) 厚生労働省(編集)
- 2) 津守真、1997、子どもの世界をどうみるか 行為とその意味、NHKブックス
- 3) 浅井(2016) 保育者養成校における保育実践の改善に関する取り組み ―教員、保育者間の共通理解の形成を通して―